



Title	初級日本語教室におけるインターアクションー「プラン」としての教室と，「プロセス」としての教室ー
Author(s)	御館， 久里恵
Citation	大阪大学， 2019， 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/73497
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 御 館 久 里 恵 ）	
論文題名	初級日本語教室におけるインターアクション —「プラン」としての教室と、「プロセス」としての教室—
<p>論文内容の要旨</p> <p>本研究では、初級日本語教育のあるコースにおけるコースデザインや教材作成といった「プラン」の構築過程を記述した上で、その「プラン」に基づいた実践における談話データを様々な観点から分析し、参与者間の相互作用による実際の「プロセス」を具体的に明らかにした。そして、「プラン」が「プロセス」にどのように反映されたか、あるいは「プラン」において想定されていなかった相互作用がどのように現れているのかを検証し、その結果から、初級日本語教育の実践において考慮されるべき事柄を提起した。</p> <p>第1部では、第二言語学習におけるインターアクションに関する先行研究を概観し、本研究の立場と方法論を述べた。第1章では、認知的側面を重視したアプローチに基づく研究として、インターアクションが認知的発達に有効であるとする「インターアクションアプローチ」について概観し、それに基づいた教育的アプローチとして、“Focus on Form (FonF)”と、「タスク中心の言語教育(Task-Based Language Teaching; TBLT)」に関する研究成果を追った。いずれの教育的アプローチも、様々なバリエーションの中でどれが効果的であるかの結論は出ておらず、目的や学習者に合わせて適切なものを選択して実践していくこと、デザインのみではなく実践の場での相互作用に着目することが重要であることを指摘した。第2章では、学習の社会的側面を重視したアプローチとして、社会文化的アプローチに基づく第二言語習得研究、さらに、状況的学習論や対話の見方から「教室」とそこでおこるインターアクションを捉え直そうとする論考を概観した。そして日本語教育において社会的見方に基づいて提案された実践として、課題提起型日本語教育、総合活動型日本語教育、自己表現中心の日本語教育を紹介し、それらが従来の日本語教育における道具主義や機能主義、脱文脈性、一方向性、学習者の非主体性等への批判を共通の土台としていることを見た。さらに第3章では、第二言語習得研究の再概念化や方法論に関する議論と、第1章と第2章で見た2つの立場の統合をはかる流れを概観した。そして、言語の学習・発達における社会的見方を基本としつつ、学習者の認知的プロセスの変容も重要視し、イーミックな視点とエティックな視点の両方から分析を行うという本研究の立場を明らかにした。</p> <p>第2部の第1章と第2章では、初級日本語テキストの作成とコースデザインという「プラン」の過程について記述し、言語の学習・発達における社会的見方や、TBLT, FonFといった認知的アプローチをどのように具現化しているかを提示した。そして第3章において当該コースの実践を記録した本研究の分析データの概要と分析の観点を記した。</p> <p>第3部では、実際の教室談話のデータを分析し、教室における参与者間の相互作用による「プロセス」を明らかにした。まず第1章では、授業における教室活動の種類や実施形態について分析した。教室活動は9種類のタスクとその他9種類の活動に分けられ、そのうち回数・時間共にタスクが最も多く実施されていた。タスクが中心ではあるが、どのユニットにおいても目標の達成に必要な文型等が特定されており、全体としてはTBLTあるいは“Task-supported Learning and Teaching”の実践でありながらも、言語形式の明示性が高い教育実践であると分析された。教室活動の実施形態は、その活動の種類によって規定され、タスクにおいてはペア／グループでの活動、あるいは全体でのランダム型や輪番型が多く、その他の活動においては大部分が教師主導型の活動であった。</p> <p>第2章では、各学習者のプライベートスピーチを分析した。プライベートスピーチは「代理応答」、「目標言語の操作」、「認知的負荷に伴うもの」、「思考の媒介」、「理解・産出に関するメタ発話」、「話題内容に関する発話」、「言葉遊び」の7つの機能に分類された。当該授業の目標言語形式に限らず、学習者が興味を持って質問した項目、自分にとって重要であると考える項目、他者から修正フィードバックを受けた項目が、プライベートスピーチの対象になる傾向が見られた。学習者によってプライベートスピーチの機能と量が大きく異なり、それぞれの学習者がプライベートスピーチによって自身の学習ニーズに合わせた学習環境を作り出していることを明らかにした。</p> <p>第3章では、タスク中の他者への援助を分析した。相手のターンに関するものとして「待機」、「促し」、「例示」、「共同構築」、「NTRI (Next Turn Repair Initiator) ・修正なし」、「NTRI ・提供」、「明確化要求」、「承認」、自身のターンに関するものとして「自己の発話の明瞭化」、「自己の発話のくり返し」、「自己の発話の言い直し」、</p>	

「自己の発話の言い換え」、タスクの様々な側面に关わるものとして「理解質問」、「説明」、「教師に質問」、「話題提供」があった。1つのタスクの過程を通して様々な援助方法がとられ、援助を受けながらタスクを遂行していくことで学習者が徐々にタスクに熟達していく様子も明らかになり、相手の反応に敏感になり対話的な援助をすることで、学習に貢献できることが示唆された。

第4章では、ペアやグループの組み合わせによる関係性とタスク遂行への影響を分析した。パートナー（母語話者ボランティア）と学習者の場合、「熟達者－初心者」の関係（対等性－，相互性＋）が多かったが、学習者に問題がなくなると「協働的」関係（対等性＋，相互性＋）に変化していた。学習者同士の場合、「支配的－支配的」（対等性＋，相互性－）関係に偏るペア、「支配的－受動的」関係（対等性－，相互性－）に偏るペア、理解や関心の差によって関係性が変化するペアがあった。「協働的」関係や「熟達者－初心者」の関係においては「知識の転移」が促進されるが、「支配的－受動的」関係や「支配的－支配的」関係ではインターアクションや形式への焦点化の機会が減り、学習に負の影響を与えることを指摘した。

第5章では、授業中のLRE(language-related episodes)と、特定の言語形式に関する学習者の産出を分析した。授業で設定された目標言語形式はLREとして多く取り上げられることで適切な産出につながるが、タスク要求によって目標形式がくり返されることで適切な産出につながる場合もある。すなわちLREは言語形式の習得に貢献するが必要条件ではなく、タスクによる要求の方が重要であると言える。また、当該形式が目標となっている授業だけでなく以後の授業においてもくり返し扱われることによって、より流暢な運用につながる。一方、それまでの授業で目標形式として扱われていない項目がLREとして局所的に取り上げられても分析や運用にまで至らない場合が多いことも明らかになった。

第6章では、IRF(Initiation－Reply / Response－Feedback)構造のインターアクションを分析した。学習者がFターンにおける「聞き手の反応」を専有するにはそれにさらされるだけでは不十分で、ある程度意識化されることが必要であること、またタスクのデザインや内容、言語的負荷によって「聞き手の反応」の表出に影響があることを明らかにした。また学習者たちはルーティン化されたIRF構造の中においても、様々な方法で自分自身の「声」を表出し自分らしさを発揮していた。さらに学習者たちはIRF構造から談話を拡張させていく方法も教師やパートナーから専有していたが、個人差やタスクのデザイン（手順の具体性、質問の抽象度や回答の自由度、実施形態）による差が見られた。

第7章では、参加者のアイデンティティと関係性、及び学習の共同体としての「教室」の形成について分析した。学習者らの「お気に入りの話題」や、特定の学習者間の「お決まりのやりとり」によって、各学習者のアイデンティティや人間関係が（再）構築されていた。また、「教室内」と「教室外」の話題が境なく往来しており、「教室」という学習共同体が生活世界の一部として位置付けられていることを見た。教師のコースデザイン／授業デザインに呼応しながらも、これらの話題ややりとりをリソースとして、能動的にアイデンティティや人間関係を（再）構築し、経験の共有をはかりながら、学習の共同体を形成する者としての学習者の姿が明らかになった。

最後に第4部では、「プラン」としてのカリキュラムデザインや教室活動のデザイン、また教室活動の実施と教室環境の醸成について、「プロセス」の分析から明らかになったことに基づいて検証を行い、初級学習者のための教育実践において考慮すべきこととして、以下の11点を提案した。

- (1)学習者にとって意義のあるテーマやトピックを選択し、カリキュラムを通して一貫性を持たせる
- (2)教室活動を授業のテーマやトピックに沿って選択・配列する
- (3)教室活動を様々な特性から考慮し、目的に合わせて適切に選択・配列する
- (4)特定の言語形式を提示する場合、カリキュラムを通して何度も触れられるよう、らせん状にデザインする
- (5)教師が活動方法の説明や例示をする際、複数の表現形式や、談話構造とその拡張の可能性についても提示する
- (6)教室活動中、学習者は必要な時に教師や他のメンバーに援助を求めることができ、教師は学習者の様子をモニターし適切な援助を提供する
- (7)教師は各ペア／グループの組み合わせによるインターアクションのパターンをモニターし、フォローする
- (8)特定の言語形式を提示する場合、教師はそれらの形式のみに固執せず多様な表現形式を認め、学習者の言語形式に対する気づきに敏感になる
- (9)学習者がプライベートスピーチを通して自分だけの学習空間を作り出せるような環境を確保する
- (10)参加者が互いの反応に敏感になり、必要な援助を提供し合いながら対話的に活動を進めることの意義を、教室内で共有する
- (11)学習者が話題ややりとりを提起したり、自らの「声」を表出したりすることによって、学習者自身の手によって学習環境や共同体が形成されていくことを歓迎する

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (御 館 久 里 恵)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	BURDELSKI Matthew James
	副 査	大阪大学 教授	渋谷勝己
	副 査	大阪大学 教授	三宅知宏
論文審査の結果の要旨			
<p>以下、本文別紙</p>			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：初級日本語教室におけるインターアクション
ー「プラン」としての教室と、「プロセス」としての教室ー

学位申請者 御館久里恵

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 Burdelski Matthew James

副査 大阪大学教授 渋谷勝己

副査 大阪大学教授 三宅知宏

【論文内容の要旨】

本論文は、ある大学の初級日本語教育のあるコースにおけるコースデザインや教材作成といった「プラン」（教案）の構築過程を記述した上で、それに基づいた実践における教室の談話データから、参与者間の相互行為による実際の「プロセス」（過程）を様々な観点を基に記述・分析し、具体的に明らかにしようとするものである。「はじめに」と「相互考察と結論」を含め 4 部（合計 16 章）A4 判 473 ページからなっている。まず、第 1 部（第 1 章～第 3 章）では、第二言語習得における認知的アプローチ（特に“Focus on Form”と「タスク中心の言語教育（Task-Based Language Teaching）」）及び社会文化的アプローチ（特に「社会文化理論（Sociocultural Theory）」）を概観し、その 2 つのアプローチを統合することが可能であることが説かれている。そして、本研究の授業計画といった「プラン」と教室で起こった「プロセス」の比較を通して、教師による「プラン」と学習者がそれを再構築する「プロセス」がどのように相互作用したのかを明らかにすることという目的を述べている。最後に、方法論を説明している。次に第 2 部（第 1 章～第 3 章）では、先行研究の理論や知見、及び本人の日本語教育の実践経験に基づいた初級日本語テキストの共同作成とコースデザインという「プラン」について記述し、本研究の協力者（学習者）及び分析データの概要について記している。第 3 部（第 1 章～第 7 章）では、その具体的な初級日本語教室における相互行為や学習の「プロセス」を談話分析の観点から記述している。第 1 章では、授業における活動の種類、形態、流れについて分析している。第 2 章では、各学習者のプライベートスピーチ（自分のための発話）を分析している。第 3 章では、教室における学習者同士ペアワークとグループワーク中に現れた他者への援助につながる行為について分類し、援助の仕方の個人差、援助とタスク遂行との関係を分析している。第 4 章では、学習者同士あるいは学習者とパートナー（教室の日本人ボランティア）の組み合わせがタスク遂行に与える影響を分析している。第 5 章では、授業中の相互行為における言語に関するメタ的なやりとりという LRE（language-related episodes）を分析している。第 6 章では、一斉授業でよく観察される IRF 構造という 3 つの順番からなる連鎖（例えば、教師が質問（I）をし、学生が反応（R）し、教師がその反応に対して評価（F）する）に焦点を当て、学習者が 2 つ目の順番である反応を使用し自らの個性をどのように表出しているのか、さらに IRF ルーティンを発展させて、どのように談話を展開しているのかを明らかにしている。第 7 章では、学習者が教室

外で嗜好する話題や教室での特定のふるまいに着目し、彼らが相互行為を通していかに自身と他の参与者のアイデンティティを構築するのかを分析する。最後に第 4 部では、「プロセス」としての教室を分析して明らかになったことと「プロセス」としてのカリキュラムデザイン、教室活動のデザインと実施、及び教室環境について、「プロセス」から明らかになったことに基づいて検証を行い、初級学習者のための教育実践において考慮すべきことを提案している。最後に本研究の意義と今後の展望が述べられている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、申請者が数年に渡って取り組んできた「初級日本語教室におけるインターアクション」の調査、分析結果をまとめたものである。その特色の第一は理論や視点にある。第二言語習得の研究は、近年、「社会的転回 (social turn)」の影響を受け、教室を「実践共同体 (community of practice)」として捉え、学習者が教室内外で参加する種々の談話活動への参加の仕方や、目標言語の社会的規範を学習するプロセスとその参加の様式の変化に焦点を当ててきているが、主な研究は欧米で行われており、しかも、移住や留学による英語の学習者に関する報告が多い。数少ない日本語の学習者の研究も、主な研究は国外の日本語教育 (例：アメリカの大学の日本語の授業) について行われたものである。これに対して、本論では第二言語習得研究の社会的転回に影響を受けながら、日本国内の大学の日本語教室に焦点を当て、初級日本語の学習者が教室において行うインターアクションの談話分析を通して、新鮮な視点をもたらしており、評価できる。第二の特色は方法論にある。従来、教室談話の研究は、多く、予め決まった教科書や教材を使用する授業を観察して行われてきたが、本論は申請者自らが担当している授業を対象にして、①他の教員と共同でテキストを作成し、②そのテキストを使用した授業において産出される談話を観察するという、2 段階の研究の方法を採用している。このようなユニークな混合研究法を採用することで、学習者の第二言語習得の過程と教室談話への参加の仕方を詳細に分析することや、教材作成に関して示唆を与えることが可能になっており、高く評価できる。第三の特色は分析にある。教室談話では、一斉授業だけではなく、学習者同士の一对一のペアワークや学習者と日本人ボランティアの複数人が関わるグループワークなど、様々なタイプの相互行為が行われることに注目し、参加者の言語的・パラ言語的なリソースや実践に詳細な分析を加えている。そして、縦断的研究を通して学習者の教室談話への参加の仕方や言語的・パラ言語的リソースの使用の変化を細部にいたるまで明らかにしている点、高く評価できる。

ただ、本論では第二言語習得や第二言語教育の分野に重要な貢献を行っているものの、分析が教室で収録された音声データのみに基づいて行われている点、やや物足りなく感じられる。参加者の非言語行動 (ジェスチャーや表情など) の分析なども加えることが今後の課題になるであろう。また、対象が一つの教室 (教師 1 名、学習者 4 名、ボランティア数名) に限られたため、調査結果を一般化することにも限界がある。

とはいえ、本論は様々な理論や視点を取り入れ、教師が作成する「プラン」と教師や学生の間に行われる「プロセス」が双方向的に与え合う影響の可能性を追求した重要な研究成果である。よって、本論文を博士 (文学) の学位にふさわしいものと認定する。